

宮本常一「土佐源氏」などにみえる

色好みの風景と国津罪

三 苦 浩 輔

一 光源氏の国津罪へのおそれ

光源氏が六条御息所に接近したのはその富と娘がねらいであつたとする私の考えはこれまでに述べてきた¹⁾。六条御息所が春宮との間にもうけた姫宮を得て、わが子の冷泉帝にいれ、その間に皇子をもうけて次の春宮をねらうのだ。だから六条御息所の姫宮を手にいれても、姫宮と男おんなの関係になるのは避けるはずだ。もし姫宮に手をつけて、あと、素知らぬ顔をして冷泉帝に入れたとすれば、父と息子が一人の女性と通じることになる。何も知らぬ冷泉帝はともかく、光源氏に限つて言えば、わが子の妻にしようと思つている女性にわれから手を出しておいて、あとをその子に下げ渡すということになるわけで、いくら女性に融通無碍な光源氏といつてもこれはためらわれるにちがいない。

作者はそこまで光源氏を落としていないであらう。

姫宮を光源氏に託す六条御息所の遺言がある。一部を引くと、
うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思

し寄るな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでできる方をもて離れて見たてまつらむと思つたまふる
濡標三〇一

「世づいたる筋に思し寄るな」とは、端的に言えば姫に手を出しにないでくださいまし、愛人になさいますなということである。後段では、姫には男と無縁な生涯をおくらせたいとも言つているのであるが、六条御息所にはなによりも光源氏の好色が案じられてならなかったのである。光源氏の魂胆を知らない六条御息所には、もつとも心配であつた。その心配の根底には、光源氏が姫と男おんなの関係になつたら、母と娘が一人の男と通ずることになるということへの恐れがあつたのではないか。それは古人が重い禁忌としてきた国津罪を犯すことになる。

もつとも国津罪は「母と子と犯す罪」とあるのでその主語は男であり、犯される母と子は直接国津罪にかかわらないようにみえるが、それでも国津罪の一端にからまつていると言えよう。

六条御息所が国津罪を認識していたかどうかは物語の表面には見えていない。しかし、姫を思いものにしてくださるなという願いには、国津罪への恐れが底流しているとみてよいであらう。光源氏にしても、わが子の妻にする予定の女性だから手を出さないというだけではなく、国津罪への慮りがあつたはずである。

光源氏に国津罪への恐れ慎みがあつたのは、玉鬘との関係をみれば納得される。玉鬘を自制したのは、国津罪へのおそれからであつた。

光源氏は母と子に通ずる国津罪は犯さなかつた。しかし父桐壺帝の后を奪い、兄春宮の妃になる予定の女性には、入内の前から情交をかさねた。その他、挙げてゆけば女性関係は切りもなく奔放であつた。もつと

もそれがよき人の色好みの実践であり、かくべつ非難されるべきことでもなかった。

二 豊穰と色好み

古来、国の統治と豊穰に責任を負う王・長者に色好みは必然であった。

古代の政治形態の祭政一致とは巫女が神を祭り、発せられた託宣に従って王が政まつしとを行うもので、王の背後に巫女がいる。多くの妻をもつのは、それだけ多くの巫女をもつということ、すなわち多くの国を統治することにほかならず、すぐれた大王が多くの妻をもつことの意味はここにあった。多数の妻妾をもつことを色好みと言うなら、王に色好みは必然である。

豊穰は人間の性行為と表裏の関係にあった。人間の性行為は生産行為にほかならず、年の初めの語らいは豊穰の予祝儀礼であった。

豊穰に責任を負う長者はより多くの女性と性行為をいとなまなければならなかった。多数の女性をもつことによって、豊穰を実現する責めをはたすのである。この点からしても長者に色好みは必然だったのである。

あれほど沢山の女性と関係をもった光源氏が不徳の好色漢として非難されず、当時はもちろん今日にいたるまですぐれた男性として仰ぎみられている理由の一つはここにある。

一人の女性しかもたない王は一国の王にしかすぎず、国たみを富み栄えさせる力の欠如した貧弱な王なのである。

そういう意味で、大は和の国の長者・天皇から、小は一家の主にいたるまで、長者はすべからず色好みであるのがこの国の民俗であった。日本人はみな、帝から庶民にいたるまで、色好みの生活のなかに生きてきた。男も女も多数の異性関係をもつて、それを不徳とせず生きてきたのである。

豊年祭に性的なものが少なくないのも、ここに理由がある。二、三の例を挙げると愛知県小牧市の田県神社豊年祭がある。三月十五日、撰社の熊野神社もしくは神明神社から一年交替で田県神社へ御神幸が行われる。御輿には二メートルはあろうかとおもわれる巨大な男根が載せられ、また五、六十センチほどの男根を胸元にだいた数人の巫女が渡御にくだわる。先導するのは巨大な赤鼻の天狗である。

田県神社に隣あう犬山市の大県神社では、三月十五日に近い日曜日に、姫の宮豊年祭がおこなわれる。こちらは女性器をしめす木を載せた御輿や、女陰を描いた幟などが神社に渡御し、女陰を象つたおそそ洞を中心に祭りがおこなわれる。

田県神社一社だけでも十分に男根の威力による豊穰予祝の意はくみとれるが、姫の宮豊年祭とあわせてみれば、いよいよ男女の性行為と豊穰の関係が納得される。

田県神社豊年祭の祭日もとは旧暦の正月であったところにも、年のはじめの予祝の意味合いが見てとれよう。

春に山から降りて田の神になる山の神の春祭り、集落から里山の雑木林の奥の祭りの庭に渡御した御神体が、祭りが終るとそのまま憑代とおぼしき松の木の根元に安置されるのを、滋賀県八日市市、日野町、栗東町などで見た。御神体は桜の木で作られた五十センチほどの男根であ

る。あるところの男根の先には白い液状のものが塗られていた。

遠野地方では、藁人形の、巨根をもつ神様を見た。乳房をもつ人形もあり、これは後のものかもしれないが、豊穰への願いの切なる心情はうかがえる。遠野の神さまの名称がなんであろうと、その原像は田の神と早乙女である。

三 歌垣とその行く方

性行為と豊穰の一体性は春と秋の歌垣の民俗からもうかがえる。春は豊穰の予祝として、秋には豊穰を感謝し、祝って、男も女もみな独り身となつて歌垣の庭に出て行き会う者と歌をうたいかわし、一夜の語りをしたのである。筑波嶺の耀歌のさまは『万葉集』巻九に、

率^{あだも}ひて^{をとめをとし}娘子^{をとし}壮士^{をとし}の 行き集ひかがふ耀歌に 人妻に我も交はらむ
我が妻に人も言問へ

一七五九

と歌われており、大和の海柘榴市の歌垣は同じく『万葉集』巻十二に、
紫は灰さすものぞ海柘榴市の八十の巷に逢へる児や誰

三一〇一

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道行く人を誰と知りてか

三一〇二

と、名を問うところからはじまる様子がうたわれている。『日本書紀』巻十六、武烈天皇十一年八月条の歌垣は太子と鮪臣が影姫をあらそう妻争いの物語仕立てになつてゐるが、二人の間で七首の歌が遣り取りされている様は、歌垣の庭で歌の掛け合いがなされる模様的一端をしのばせるものがある。ちなみにかがいは掛け合いの約音である。

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪（三苦）

こうして人間が率先して性のいとなみに精を出し、豊穰を予祝したのである。日本人は農耕の民だから、農耕儀礼の一つとして歌垣も絶えることなく伝承されて来たであろうことは容易に察せられる。ただ、時の流れとともにさまざまに変容をとげ、人びとの意識にも変化が生じて単なる性の交歓にすぎぬ、一種の奇習になつたものもあるであろう。

宮本常一氏著『忘れられた日本人』⁽²⁾に、氏が対馬で採集した歌垣の話が収められている。「対馬にて」によつて紹介すると、対馬に靈験あらたかな六つの観音があり、六観音まいりが「中世の終り頃から盛んになつ」（213頁。注213頁。以下同じ）ていた。北部の佐護の観音堂にも巡拝者の群れがあり、民家に泊まると村の若者が宿を訪ねて「巡拝者たちと歌のかけあひを」して、「節のよき文句のうまさで勝敗をあらそう」（213頁）。歌合戦には賭物があり、最後には男は女に体をかけさせた。女が男に体を賭けさせるのは「すくなかつた」そうで、それは女の方から言いにくかつたからであろうが、それにしても「すくなかつた」というのは、全くいなくはなかつたということである。もつとも、うがつた物言いをすれば、女が男に身をまかせたければわざと負ければよいわけで、なにも女が口にだして男に体を賭けさせるにはおよぶまい。要するにどちらが勝つても負けても行き着くところに行き着くのだ。鈴木という歌の名人は歌合戦に負けたことがなく「巡拝に来たこれというようない美しい女のほとんど契りを結んだ」（213頁）そうである。

宿の庭に火がたかれ、巡拝者と村の青年は「夜のふけるのを忘れて歌いあい、また踊りあつた」（213頁）。筑波嶺の歌垣に「人妻に我も交はらむ 我が妻に人も言問へ」と歌われていたように、佐護も「嫁や娘の

区別はなかつた。ただ男と女の区別があ⁽²¹³⁾るだけであつた。

このような歌垣は明治の終り頃まであつたという。昭和二十六年に調査のために対馬を訪れた宮本常一氏は、佐護の近くの佐須奈で六十すぎのおばあさんたちと、歌合戦はこうもあつたろうかと思われる歌の掛け合いを体験しており、「だんだん興奮して来ると、次第にセックスに關係の歌詞が多くな⁽²¹⁴⁾」つたそうで、歌合戦の淵源が歌垣にあればそれが性的色彩を帯びてゆくのは自然の流れである。

余談ながら、歌垣にかぎらず、厳しい労働に従事する人たちの歌う歌詞は性的に露骨になつてゆく傾向があることを指摘しておく。例えばソーラン節である。土地の漁師の歌うものは、歌いすめば人前では歌えない、猥歌にちかい文句がたらねられていくという。今はあまり見かけなくなつたが、鶴嘴を振り上げて線路を保守した工夫たちのうたう歌もそういう傾向があつた。厳しい肉体労働を、猥歌を歌うことによつて心身を刺激し、発奮させたのだ。元氣づけるという名を負うチアー・ガールは、露出の多い演技服と四肢の動きによつて性的刺激を与えて男性競技者を発奮させており、その効能においてソーラン節とひとしい。対馬の佐護の例は、歌垣に発する歌合戦がすでに性的交歓の場にすぎなくなつてゐることを示しており、宮本常一氏が左近熊太翁から聞いて「世間師(二二)で紹介する「南河内郡磯長村の上の太子の会式⁽²¹⁵⁾」(二二四)もそうである。ちなみに氏が熊太翁に初めて会つたのは昭和十一(一九三六)年二月十一日、熊太翁は二十二歳で西南戦争(一八七七)に出たというから、およその年齢は知れる。

熊太翁の話に入る前に、世間師について一瞥しておく、三省堂の『大辞林』は世間師について「①世間慣れして悪賢い人。世渡りの巧み

な人。②旅から旅に渡り歩いている人」と説明している。

非定型の無季俳句の俳人として世評の高い山頭火も、⁽²¹⁶⁾「行乞^{ぎょうこ}をしながらその日一日分の糧を頂戴して木賃宿にとまり、旅をつづけた世間師の一人であつた。同宿の人間はおおむね世間師で、『山頭火日記⁽²¹⁷⁾』には多様の世間師が見えている。昭和五年九月十八日条に次の記事がある。

同宿の人は又語る『どうせみんな一癖ある人間だから世間師になつてゐるのだ』私は思ふ『世間師は落伍者だ、強気の弱者だ』⁽²¹⁸⁾

二六。注3第一卷一六頁。以下同じ

この同宿人は朝鮮人か内地人か分からないほど旅なれした(但し言葉のアクセントから前者と知れる)アル中患者であるが、二人の会話を世間師の一面がみえている。山頭火が昭和五年から七年にかけて同宿した世間師を日記から拾いあげていくと次のようなものがあり、世間の底辺にうごめく人たちと、当時の世相がうかがえる。

- 虚無僧(タケ、尺八吹き) 世間坊主 坊主 遍路 お稲荷さん 山伏
- ゑびすや 按摩 按摩兼遊芸人 浪花節屋 女浪花節語り 女テキ
- ヤ 猿回し 曲搦の栗餅屋(六人) 支那人の軽業師 旅絵師 ヘ
- ぼ画家 売卜師 八卦見 籠屋 周旋屋 研屋 葉屋 鑄掛屋 鍋
- 屋 お札くぼり 勅語額売り 土方のわたり ルンペン 活弁の失
- 業者 絵の具屋 箒屋 馬具屋 松葉杖エツキス売り 八目鰻売り
- 牛肉売り 皮油売り 豆売り ナフタリン売り 櫛売り 印肉屋
- 飴売り 骨董仲買人 競馬屋 出来合いの旅人夫婦 などなど⁽²¹⁹⁾

部屋を一人占めできるのは稀で、一室に五六人、ひどい時は十人も押し込められて、キ印老人⁽²²⁰⁾がおりカンシヤク持ち⁽²²¹⁾

がおり、一癖も二癖もある人間が一夜をとともに過ごしているの話をとびかう。「一枚も出せば飲んで食って、そして抱いて寝られるといふ」(3-117-76) 安い女の情報が披露されたり、かと思えば「一円位で助平後家はありますまいかなど、いふ」(3-117-77) 老通路がいる。宿賃が二、三十銭だから、世間師に一円は大金だ。世間師は屋外の稼ぎなのに、競馬屋は宿でも玩具の馬を走らせて、本物同様に一銭二銭の馬券を売り出し、一銭から十銭までの品物を渡した(3-117-78)。痴話喧嘩に猥談、山頭火に「おかしかった」(3-117-82)といわせた研屋の「オットセイのエロ話」とはどんなものだったのであろう。行き当たりばったりでくつついた出来合いの旅人夫婦はいつまで夫婦で旅をつづけられるものか。それにしても性は人間の業と言うべきか、いかなる境遇にあつても性からのがられないように、行乞の僧山頭火が安い女の話を書き「あなかしこく」ともらしたのはどういう心であつたか。

余談ながら、童話「ごん狐」で知られる新美南吉の「花のき村と盗人たち」(昭和十七年作)に「旅あるき」をする釜師、錠前屋、角兵工獅子、大工が見えている。それぞれ釜右工門、海老之丞、角兵工、鮑太郎と稼業にちなんだ名前がつけられていて、海老之丞には海老錠が利かせである。釜師は先にあげた鍋屋と同類であろうが、かれらが昨日までの旅あるきをやめて泥棒のかしらに弟子入りしたのは、童話とは言え、世間師の危うさ、或いは日銭稼ぎの容易なさが見てとれよう。女にうつつを抜かしてばかりもいられたのであつたのである。

筆をもどして、上の太子は聖徳太子の廟で、旧四月二十二日、ここで会式があり、「太子の一夜ぼぼ」と言つて「この夜は男女共に誰と寝てもよかつた」。大勢の参詣者は堂の前に集まり、音頭をとつて石搗のよ

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

うなことをする「ぞめきの中で男は女の肩へ手をかける。女は男の手にぎる」(2-114-44)。相手が拒まなければ合意がなり、そこらの山に入つてだきあつた。

石搗のような仕草を具体的にイメージできないけれど、音頭にあわせて手を打ち足踏みして男女が踊る風を思えば、踊りつつ歌の掛け合いをして気に入る相手を求めた歌垣を髣髴させるものがある。しかも旧暦の四月二十二日は現在の五月下旬になるうか、それは春の歌垣の時節である。さらに、「一夜ぼぼ」と言うように一夜かぎりというのが、一層その感をつよくする。

豊穰の予祝という歌垣本来の記憶はうすれながらも、年に一度の性の解放の興奮と欲びはしっかりと体にしみついており、毎年、春になるとその時が待たれる。待たれるのは性の解放なのだ。待たれてならないから、ただ、春の或る日にはなく、日をいつと固定しておいた方がすつきりする。一夜ぼぼが毎年日を決めておこなわれる上の太子の会式の日になつていったのには人びとの確と意識しない、そういう事情もあつたのかもしれない。

年に一度の一夜ぼぼが、明治元年には「いつでも誰とでもねてよい」(2-114-44)ことになり、「昼間でも家の中でも山の中でもすぎな女とねることがはやつた」。未婚者が夜這いに行く際の亭主持ちとは寝ないという「制限」もなくなつて、「みなええ世の中じやと」(2-114-45) あそびほうけた。一年中、誰彼なしに、家の中であろうとどこであろうと、機会さえあればつるんでいられるのだから、こんな結構な世の中はないと言えと言えしよう。

一夜ぼぼと言つても、それなりの規範のうちに営まれていたはずのも

のが、ここにいたってはただの助平事になりかわっている。性の規範もなにもあったものではない。それは人間普遍のものなのか、それとも日本民族固有の好色な性癖によるものか知らないが、日本人はそういう生活を長いこと営んできたのである。

さすがに無制限の性交渉は警察がやかましく言うようになり、一夜ぼぼは明治の末頃には終息をむかえた。

十五歳のときにはじめて一夜ぼぼに行つて、以後、ずっと行つていた熊太翁は豊富な性体験をかさねたはずで、後年、家を出て世間師の道をあゆむようになって、行つた先ざきで女と寝ることが飯を食うのとなんらかわらない、日常の当り前のことになつていたのであろう。

西南戦争に出て顔に大火傷をして大阪の陸軍病院に百五十日入院、顔はひきつれ、眼は半分つぶれて醜い顔になった。陸軍病院を退院して但馬の湯村へ湯治に行き、元気になつてもどつて来ると、吉野川の北垣内というところへしばしば行つていううちに好きな女が出来て家を出た。

八阪八浜にしばらくいると兄が連れもどしに来たので帰り、その後嫁をもらつて「五十二で妻にはなれるまで、子供を育てることと仕事におわれて」(212四六) 過ごした。後添えももらわず、子供もあとを継いだので、五十六歳で旅に出た。

翁の五十六歳がどういう時であつたかというところ、一夜ぼぼが止んだ明治の末の頃になる。二十二歳の時西南戦争(一八七七)に出たというのを基準にして計算すれば、明治の末の四十四年は一九一一年だから、熊太翁は五十五、六歳である。つまり、十五歳で一夜ぼぼを初体験し、嫁をもらつても出かけていて、明治の終りに一夜ぼぼが止んだ頃に旅に出たという計算になる。妻とはその三、四年前に離れていたのだが、一夜

ぼぼがなくなつたので(また、いつでも誰とでもよかつたのも制限された)、その方面の面白味がなくなつて旅に出たのであろうか。まさかかと思うが、一夜ぼぼの終息と旅に出た時の重なりが、そういう想像を刺激しないでもない。性は男にも女にも実に自由自在であつた。

旅に出て、京都で大川という八卦見と出会い、この人の尻について歩くことにした。時には一人で歩き、北海道にも行つた。小樽には僧になつた息子がいたのである。家には戻らず、足のむくま杖をつき尻はしよりをして世間を歩きまわつた。

宿で枕をならべて寝ているとき、八卦見は良い話をしてくれた。

左近さん、宿へとまりなはつたら、女中はんに一番親切にしてあげんなりませんで……女子衆ちうもんは四六時中安まる間がない。それで、女中はんはできるだけつかわんようにして、そのひまだけ、らくするようになってやんなはれ(212五四)

宿から宿へ泊まり歩く世間師、底辺にうごめく人間を見て来た人生の達人の言は、私にも感銘が深い。

一人旅の時は、一人ものの気らくさでちよいちよい女に出を出した。手を出したというほどではないが、ついそういうことになつた。(212五四)

醜男の旅の者だから、夫婦になりたいというのではない、ただ「その時だけの交り」を女から求めてくる場合もあつた。とくに八卦を見てもらいたいというほどの女なら、うちにながしかの悩みを抱えていて、それが男と寝ることと気のまぎれることもあるのだろう。女の側に、行きずりの男と寝るのをとやかくやとためらう迷いはない。

目の色をかえて女を物色し、求めるのではない、身近に女の姿があれ

ばいつとはなしに横になつてゐるという情景なのであろう。飯時に飯があれば飯を食うのが自然なように、なんの構えることもない自然な振舞いである。事情は女においても等しかろう。そして、いつとき抱き合つて、事がすめばさらりと離れていく。お互いにどこの某と知る必要もない、いつときの抱合に身が満たされればそれで十分、そういう状況であらう。歌垣、そして一夜ぼぼの民俗はこういうところに行き着いてゐる。

中にはしつこい女もいて、旅先で馴染みになつた信濃巫女は「はなれたら呪い殺してやる」(21254)と離れなかつた。逃げ歩いても「眼通力のある女」なので、どこに逃げても見つけてはやつてきたという。熊太翁も「たつた一度」と言つてゐるように、これは特異な例であらう。

「女とねるのは風流の一つ」(21254)とは、経験をかさねた翁にしてはじめて言える言葉であらう。無理強いがあつてはならない、それとなく、いつとなく、女をその気にさせて行つてはじめて風流と言えよう。

「昔の公家は」(21254) 女に歌をおくり、夜、訪ねていく。男が来ない、女の方から歌をおくることもあつた。男が公家なら、女は唐衣に身をつつむ美女か。それにしても火傷で顔面ひきつれ、片目はつぶれかかつた老世間師にして「昔の公家」を持ち出してくるとは、いささかの感慨なきにしもあらずである。

古都京都の女と言へば、現代の人間でも「おっとりとして風流のわかる女」(21255) と思いがちなもので、ある宿屋で気品のある女中がきつたので、歌を書いてお膳の上のせておくと、お膳を下げにきたとき、ちらと見て、帯の間にはさんで出ていった。なにも言わず、表情のひとつも変つていなかつたかもしれない。来る来ない半々の気持ちで待つて

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

いたであらう熊太翁の寝ているところへ、女中が「そつとやつてきた」(21255) のは、女中勤めをすませて体が空いてからであらうから、夜も更けていたはずである。

気品のある女は行きずりの男に、まして老いぼれの旅人には目もくれないと思うのは大間違いで、そういう女人でも、男に恋歌のひとつでもおくられるとわれから出向いて身をまかすものなのだ。それが「風流のわかる女」だと言つてゐる。

「気品のある女」は恋歌をわたすと「大ていは言うことをきいてくれた」と言うのは、これが一度や二度ではなかつたことを示し、「畿内を出るとあまり通用しなかつた」と言うのは鄙の女は風流がわからず気品がないということだが、失敗したくやしさを下にかくした物言いでもあらう。

目の色をかえて日銭をかせぐ『山頭火日記』の世間師とくらべて、熊太翁はそんなこともなかつたようで、八卦見の尻にくつつき、或いは足のむくままの一人旅をつづけて、その途中々々行きずりの女と寝てはさりと別れる気楽な世間師であつた。

熊太翁はたまたま宮本常一氏に出会つてその体験を後世に残したが、こんな男おんながこの日本の田舎にも町中にも少なからずいたのである。

ここまでくると、歌垣の流れからはずれて、旅と性という視点から見る必要がある。

四 旅と女

「旅と宿と女」は一括りのものであった。宿に入れば宿の飯を食い酒を飲むように女と寝てなんの不思議もなかった。自然の流れである。宿の「飯盛り」女はいかにも飯の世話をする女の謂であるが、実は旅籠屋の遊女、宿場女郎であった。「神靈矢口渡」第三に、

コリヤ／＼太郎左。わりや夕部のふとり肉しめたなく。何をいふぞい。アノおたふく。腕は松の木腰は白泣声猪に似たりけりヤアいふなく／＼夫でも今朝立際にこそと二百なげやつた 三四四

とあるのは、太郎左なる者が連れに内緒に飯盛りと寝たのをかまわわれている話である。「ふとり肉しめたな」とは肥えた女と寝たなということ、連れにそう言われて、太郎左があんなお多福、腕は松の木、腰は白みたいに太くて、泣き声は猪に似ていたと、ばつが悪くて、女は不器量だったと言いつているのだが、連れは立ち際に女にこそつと二百文渡したのまでちゃんと見ていた。二百文は相場らしい。同第四に、

齊な常陸の抜参りの小娘をかどはかし神奈川へ飯盛に売た事覚てゐるか。 三七九

とあるのは、攫った小娘を神奈川の駅に飯盛りとして売り飛ばしたことを咎めているところである。東海道を旅した弥次・北八も当然のことのように飯盛りと寝ている。『東海道中膝栗毛』二編上、三島の宿である。三島女郎は富士山の雪解け水で化粧するので美しいと評判で、弥次・北八は宿につくと早速「しろもの」の話である。「しろもの」は代物で商品の意だが、ここは女郎の意。

此内やどの女ぜんをもちきたりならべおきて「サアおあがりなさいませ。コレちやア、おたつどんよ。その飯櫃ウもつてきなさる

北八」ときに、こゝにやアしろものはなしかの女「此あいだ木曾海道の追分から来た、女郎衆がふたりございます。おさみしかアおよびなさいませ 巻二「こいつおもしろかるふ。器量は 女「がいにゑいといふでも、おざりましない。マア十人前でおざいます 北八「ハ、ゝ、十人まへのめしもりか、おもくろい。呼でくんな。

一一六

出てきた飯盛りはお竹とおつめの二人、弥次・北八の相方である。膳は引いて銚子、さかづき、さかなをもち出して酒となり、やがて相方と同衾のはこびとなる。

これが江戸の頃の旅の風景であった。わが民族がすぐれて好色だから、旅に出ると女を求めずにはいられなかったのか。もつとも旅に出て寝る女は女郎ばかりではあるまい、亭主以外の男と寝ることをためらわぬ女も世間には少なくはなかつたはずで、彼女らは旅の者に身をまかすのをいとわしい。旅の者とみて、我から声をかける情の深い女もいたであろうし、世間にはいろいろの男と女がいるのだ。とすれば「旅と女」から宿をはずして、単に「旅と女」を考えてもよい。

蛇足ながら、『東海道中膝栗毛』にふれたついでに、たまたま手にした春画帖『東海道五十三次』の「上り 京都」の末尾の部分を紹介しておく。古い作品ではないようだが、宿場ごとに一枚の絵があり、数百字の戯れ文が付されている。

（京女は）殊に陰情ふかくして閨中のもてなし他国の女にたぐいあらず我朝に男と生れたらん者一度なりとも京女郎の玉門のあじを知

らずんばあるべからずされば年老いぬ内に東海道を修行し其国々のあじを心み上京して京女の陰中にきをやりて男の本懐をとげ給ふべし男のしあはせ是れにまさる物なしとぞ

戯れ文ながら、熊太翁が京女をたたえていたのも、さもあるべしと感ぜられる一方、東海道中五十三次の旅をかきねながら宿場ごとに「修行」していく春画が描かれるほど、あらためて「旅と宿と女」は一つものだという感じを強くする。

五 異郷への旅と女

ここまでくれば、男女の語らいは豊穰の儀礼とは無縁のものになっている。では、なぜ在所を離れて旅に出れば、男は頭のなかを女に占領されてしまったかのごとく血が騒ぐのか。手垢のついた妻や妾等からの解放が男をそうさせるのか。

古典文学にしたしむ者にとって、他所の国へ旅に出た者と言えば、先ずは在原業平とおぼしき『伊勢物語』の昔男が思い浮かぶ。『伊勢物語』七段から十五段の東下りがそれで、伊勢、尾張、ちよつと脇道にそれて信濃、そしてふたたび三河、駿河、武蔵と旅をつづけた昔男は、武蔵国人間の郡三芳野の里で藤原氏の血を引く女の娘に求婚している。物語はその結末にはふれていないが「人の国にても、なほかかることなむやまざりける」（十段）と記している。都ではあちらこちらの女性と関わりをもち、あぐくには妃に入れようとみがきあげられた高貴な姫君に手出しをして都にいられなくなつて東に落ちて来たのに、それでもなお女への手出しがやまないと嘆じてみせているのだが、旅に出た男には自

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪（三苦）

然な振舞いであつた。

武蔵国からさらに、ふらふらと陸奥国まで旅をつづけた昔男は土地の女に惚れられた。それなりの身分はありながらも鄙の女には都びとはめづらしく、身も心もうずいて歌をおくつた。人柄はもろん歌までもが田舎じみていたけれども、男は行つて寝てやつた。ただし、まだ満足しないうちに鳴いて男をかえした鶏を「きつにはめなで」（水槽にぶちこんでやる、もしくは、狐に喰わせずにおくものか）と詠んで、お里がしれてしまった。それで男は二晩とは行かなかつたようだ（十四段）。しかし、ともかくも、旅に出た男は旅先で女と寝るといふ筋はおさえてゐる。

十五段でも男は陸奥の女に通つたとある。

なでふことなき人の妻に通ひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのお山のびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へども、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせんは。

武蔵国も陸奥国も都から遠くはなれた鄙の国、異郷の地である。すなわち、三芳野の里の女以下の物語は、異郷を訪れた男が異郷の女と契る話だと整理することができる。

ただ、十五段では、女がいつまでも男を通わせ続けているのを当の男が訝つて、その心の奥底を見てみたいと言つている。男が通つたことがいけないのではない、いつまでも通わせているのが問題だと知れる。つまり、一晩ならいいのだ。女は亭主持ちなのだろう。

ここにおいて、家刀自が来訪者を一晩だけでもてなす民俗との関連が想

起される。古代の新年であつた新嘗の日に、物忌みする主婦が亭主を外に出して客を迎えたのはよく知られている。『万葉集』の次の一首がその証歌である。

誰そこの屋の戸押そふる新嘗に我が背を遣りて齋ふこの戸を

三四六〇

新嘗に訪れて一夜だけ契つていく稻の神の姿がここにあり、この信仰がさきに述べた一夜ぼぼのみなもとにある。だから、刀自が客をもてなすのは一夜だけで、いくら都の人に惚れたからと言って、通わせつづけるのは問題なのだ。

十五段はその方面から説くべき問題があつたのだが、男が旅先、訪問先の女と契る話に筆をもどして、神話からいくつかの類話をひろいあげてみよう。

須佐之男命は高天原で天照大御神の「菅田の阿を離ち、其の溝を埋め」るなどの乱暴をはたらいた。「阿」は「畔」で、これらの狼藉は農耕を妨害する「畔放、溝埋、樋放、頻蒔」等々列挙される「天津罪」の冒頭にあげられており、須佐之男命はこれにより出雲国に追放された。そして、よく知られているように八俣袁呂知を退治して櫛名田比売を妻にする。

高天原からすれば出雲国は鄙の国、異郷の地である。話を単純化すれば、異郷の地を訪れた男が異郷の女と契つたということである。その限りについて『伊勢物語』の昔男と変わるところはない。

大国主命は因幡国の八上比売を手に入れ、兄の八十神に殺されて根堅州国へ行っては須佐之男命のむすめ須勢理毘売を妻にした。出雲の大国主命には因幡国は異郷の地、根堅州国にいたっては異郷も異郷、死者の

世界である。

高天原から葦原中国、日向国の高千穂に天降つた天照大御神の孫・迹迹芸命は笠紗の御前で出遇つた木花之佐久夜毘売と結婚した。三柱の御子が生まれ、末子の山幸彦は失くした兄海幸彦の釣針をもとめて海神宮へ行き、海神のむすめ豊玉毘売命と結婚する。丹後国与謝郡の浦島子もまた海彼へわたり美女を得ている（丹後国風土記逸文、万葉集卷九・一七四〇）。第二十八代宣化天皇の御代、百済を救う任を帯びて任那へ渡る大伴狭手彦は唐津に赴き、篠原村の「容貌美麗」なる弟日姫子を妻問ひ、結婚し、それから任那へ渡つて行つた（肥前国風土記）。なおこの後、弟日姫子を訪う大伴狭手彦に似た男の話があり、男は摺振峰の神（蛇体）であつたという神婚説話になつている。

いずれも異郷を訪れ、異郷の女性を得る説話である。その頂点にあるのが光源氏の物語で、須磨・明石に下つた光源氏は明石で明石君を得て明石姫君をもうけた。

なお『源氏物語』以後の物語として中世の『御伽草子』から「御曹子島渡」をあげておく。御曹子・源義経が大日の法をもとめて土佐を船出し、王せん島、はだか島、女護の島、菩薩島、ゑぞが島等々を経て千島に至り、大王の娘あさひ天女と契つて大日の法を手に入れて土佐に帰還する物語である。大日の法入手云々はともかく、異郷の千島であさひ天女と「浅からず契をこめ、心うちとけ給ふ」（一一七）、二世の契」（一二三）を結んだことをここでは指摘しておきたい。

このように異郷を訪れる者があり、異郷の女と恋をし、結婚するといふ説話・物語があつたのである。⁴⁾ 説話は絵空事とは限らないのであつて、現実の民俗信仰が基底にある。古代の伝承の上になりたつ物語も例

外ではなく実生活を踏まえているのだ。すなわち説話・物語とかわらないかたちで、現実においても鄙の国に旅する者がおり、鄙の女と一夜の契りを結んでふたたびいずれかへ歩み去る者たちがいたのである。

そういう伝統の上に弥次・北八が創りだされ、さまざまの世間師がおり、熊太翁がいたのである。そして、彼らの存在を許す性風土があった。

六 宮本常一氏土佐源氏の性風土

1 性の原風景

先頃「母と子と犯す国津罪の文学」⁽⁵⁾をまとめた。一、二書きもらしがあり、光源氏については国津罪から免れていることを夕顔玉鬘母子については触れながら、六条御息所母子についてはもらしていたので、その点を補いたい思いもあって、小稿を光源氏と六条御息所の関係からはじめた。

それだけではなく、宮本常一氏の御著作「土佐源氏」を忘れていた。ずいぶん前に読んで深い感銘をうけていながら、このたびの一本をまとめる際にすっかり失念していたのである。

対馬の六観音まじりの歌合戦、一夜ぼぼ、あるいは熊太翁の例などなどを通して見える性風土を単に好色というのは当たらないような気がしている。性は抑制されるものではなく、三度の飯を食うのが当り前のように、日常当り前のこととして、そこら村里をうろうろして生きている人間のなかにあつたのだ。とくに「土佐源氏」を読んでその感を深くする。豊穣や常世・異郷の女性にからまる民俗信仰が根底にあることを思

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪（三苦）

えば性は卑しむべき事ではなかったし、助平事でもなく、そういう生活の流れの末に、相手をえらばぬ性関係もできた。国津罪を犯すことへの慎みはおろか、国津罪がなんであるかさえ知らぬままに夫婦生活を営む者もあつたのである。

「土佐源氏」は宮本氏が、「土佐の山中、禰原村」⁽²⁻¹⁻¹³⁾に住む八十を過ぎた盲目の老人から聞いた話である。妻に手をひかれてこの地に流れてきた老人は、「人様に迷惑をかけさいせねば」⁽²⁻¹⁻¹³⁾と橋の下に小屋掛をして住むことをゆるされて、以来三十年ちかく老妻と二人、むしろ困いの乞食小屋で暮らしてきた。禰原村に流れついたときには五十を超えていたことになる。

晩飯のあとの老婆の仕事は農家にあまりものをもらいにゆくこと、それで露の命をつないできた。老人は用便か水浴びで川原に出る以外は、糊殻の上にむしろを敷いただけの土間に坐つたままで一日をすごしている。

「八十年何もしておらん。人をだますことと、おなご（女）をかまう事ですぎてしまつた」⁽²⁻¹⁻¹³⁾という言葉から、老人の話は始まる。

小稿では老人の名を仮に禰原とし、宮本氏の熊太翁にならつて禰原老とする。

禰原老は「母者が夜這いに来る男の種をみこもつてできた」⁽²⁻¹⁻¹³⁾三子なので、父親はいない。夜這に来る男が一人ならば女には男親の心当りはあるはずだから、男親がいけないというのは、複数の男がきていてわからないということなのか、それとも、わかつていながら父なし子にしたものか。望まぬ妊娠は災難のようなものだから、女はお腹の子

を流そうと、川に入って腰を冷やし、石垣に腹をぶち当て、木の上から飛び降りるなどところろみた。月満ちても出て来ない子の出生を促すために、家の回りをとんと走りまわり、あるいは高い所から飛びおりる話は、かつて当の人から聞いたことがある。とんとんと、あるいはどすんと着地したはずみに、お腹の子もどすんと下に落ちる、生まれ出てくるといふのは大変わかりやすいが、私に話してくれた人に効果があったように、この女も流産せずに、月足らずで子を生んだ。月足らずで出てきたのは、飛び降りた効果が、わずかながらもあったということなのであろうか。

生まれたものを殺すのはさすがに可哀相で、父なし子にして爺婆が隠居に引き取り育てた。その後母親は嫁入り先で蚕の世話をしている、体にふりかかったランプの油に火がついて焼死した。そんなわけで、櫛原老は二親の顔を覚えておらず、気がついたときには、子守り奉公する女の子たちのなかにまじって、お宮の森や河原で群れになってままごしたり、けんかしたり、歌をうたったりして遊んでいた。

子守と一緒に遊んでいた男の子たちが学校に上がり、家の手伝いをして遊びの仲間から離れていったなかで、彼は十歳になっても学校へ行かず、爺婆に「山へ行け田へ行けということも」(211三五)言われず、彼一人は子守のなかで遊びつづけた。「女の子とあそぶ方がよかった」(211三四)し、子守たちは彼を「かわいがってくれた」(211三五)。そんな中で「わるい事」をおぼえたのである。

雨の日は、子守たちは納屋に三、四人ずつ集まって、眠った子をおろして遊ぶ。積まれた藁にもぐって藁まみれになるのは楽しい遊びだ。私にも記憶がある。学校の帰りみち、脱穀がおわってそのまま積みあげら

れた稲藁のなかに、大声をあげながら頭から飛び込んだのは、農家の人には迷惑千万のことながら悪戯盛りの学童には楽しい遊びであった。しかし、やがて子守たちはそれにもあきる。するとそこに体がある、体はいいもてあそびの道具・おもちゃになる。昔、子供になんのおもちゃも買ってやれなかつた貧乏小説家は、自分の一物をこどもにさわらせて玩具代わりに使っていたという話を読んだことがあるが、体は退屈しのぎの、恰好のおもちゃになるのだ。

女の子たちは、前をはだけて太股の大きさをくらべあう。パンツというものはまだなかつた時代だから、太股をさらせば見えるものが見えて、「×××をくらべあわせたり、そこへ指をいれおうてキヤアキヤアさわぐ」(211三五)。まだ生理前の子たちながら、性器にただならぬ関心をもっているのがうかがえる。やがて男の子に「おまえのも出せちうて」出させておもしろがっている。

そのうち、年上の子守が、××するとはここに男のをいれること、「おまえもおらのにいれて見い」(211三五)と言って彼のものを入れさせた。これが女を知ったはじめであった。その子は家の裏の茅のかけで、姉と若い衆が寝ているのを見ていて、男と女はそういうことをするものだとしていたのである。集落のあちらこちら、家の中でも野天でもこういう情景はくりひろげられていて、子供が目にする機会も少なくなかつたのであろう。何事かはよくわからないままに、初潮を迎えようとする少女をそれが刺激する。

言われるままに小さなものを入れたものの「別にええものとも思わなかつた」。子守が「なんともないもんじゃの」と期待はずれの言葉をもらしたのは、姉が「えらいうれしがりよつた」のを見ていたのである。

遊びごとが一つふえた。子守たちは「おらにもいれて、おらにもいれて」と言い、一人しかいない男の子は「みんなにいれてやってあそぶようになった」(211三五)。ここに性は秘すべきものという感覚はない、一人の子を相手するとすぐ次の子という具合に、次つぎと子守の中に自分のまだ発達していないものをいれていくのは、雨の降る日の遊び事なのだ。恥ずかしいという感情はない。そして「あんまりええとも思わだったが、それでもやつぱり一ばんおもしろいあそび」(211三六)であった。

「ええとも思わだった」のは、いい気持ちと思わなかったのか、それとも子供ながらにははならないことをしているという後ろめたいものを漠然とながらも感じていたのか。前者とすれば、体が成熟していないのだから当然である。後者ならば、こんなことをするのはあまりいいことではないという思いが、漠然とながらきざしていたということになるうか。それでもこれが一番おもしろい遊びだったと言うのだから、かりに後者だとしても、たかが知れている。「わるい事」をおぼえたというのは、櫛原老後年の感懐である。

この遊び事が男の子にはもちろん、少女たちにとつても性とかかわりを決定づけたと言えよう。相手は特定されない、機会があれば誰とも寝て満足すればよい、体が欲するままである。性の多角関係が自然のなりゆきのままにいとなまれる、そんな性風土の土壤がここにある。

ある日、年上の子が彼と寝ていて「えらい血を出してのう、たまげたのなんの。女はないていによった」(211三六)。なんの知識もないから、事の最中に血を見て肝をつぶしたのはよくわかるが、女の子もいつもの事をしていて血が出たのだからわけがわからず、大泣きをして帰るしかない。

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

翌日、河原に行つてみるとその子も来ていて「ケロツとしている」(211三六)。どうしたとたずねると、あれは月の障りというもので大人になったしるし、だから近ぢか子守をやめる、お前とはもう遊ばないと言う。祝いに赤飯を炊いてもらつて、

「赤飯食べたら、若い衆がよばいに来るけえ気をつけんといけん」と(211三七)

「わしとではいけんのか」

「おまえ若い衆じゃないもん」

若い衆が夜這をかけるのは当然のこと、やられて嫌なら用心するしかないのである。それでも、この少女の物言いの中に若い衆を拒否する風はない。いづれ集落の性の多角関係の一角を占めていくのであろう。

2 国津罪の夫婦

櫛原老の十五歳のときに爺が中風で死んだ。爺が男に百姓奉公も、家の手伝いもさせずにおいたから何もできない「なまくら者」(211三七)になつてしまったので、母方の伯父の言いつけで家より三里ばかり離れた在所の博労の家に奉公に行つた。

婆の死後、家には伯父がいるばかりだから、帰るべき家はなくなつてゐる。家のない者は若い衆になれなかつた。

牛を遣り取りして稼ぐ博労のための宿があつた。「ちいとばかり小ぎれえな後家の家で」(211三八)、博労たちはそこに泊まり、酒を飲めば博打もうつ。後家とも寝る。博労は博労宿を泊まり歩くから、先ぎきの宿に手をつけた後家がある。後家は後家で、ねんごろになつてゐる博労のほかに関係する男があり、それがばれて「大事」^{おほごと}になることがしよつ

ちゆうである。博労と宿の後家とはたがい多角関係だから、この後家は俺のものだと独占しようとする者がいれば揉め事が生じるのは必然だ。

親方について歩く禰原老はそんなことばかり見て「自然そういうこともおぼえ」(2123)た。また親方は助平で「なじみの家のまえを通りかかると、昼の日中でもすぐ座敷へ上って女をころがす」。もちろん、家の中に入っていく親方は、なにをしに入っていくのかを弟子が察していることを承知しているはずだが、弟子の目などは頭から無視している。飯が食いたくなつたから食に行くというのにひとしく、陰でこそそする、恥ずかしいことでもなんでもないのだ。弟子は牛の番をして親方の戻りを待ちながら、時には牛を木につないで置いて「隙見」に行つた。外からのぞけるところでつるんでいるのだ。覗き見てそれなりの興奮をおぼえたか。

十七八歳にもなれば、どこぞの後家にかまわれることもあつたらうか。二十歳まえの若い者に食指をそそられてわれから手を出す後家、若い者の面倒をみてやるというくらいの気持ちで寝てくれた後家もいたであろう。彼の方から隙をみて後家に仕掛けたこともなくはなかつたかもしれぬ。その方の知識は豊富なうえに、若者なりの精力もついでいようから、この想像はそんなに見当違いではあるまい。

それに、禰原老は若い衆になれなかつたので夜這に行けなかつた。集落の娘は若い衆のもので、若い衆でないものの夜這がばれると足腰立たないほどの制裁をうけた(2114三)。男女多角関係とは言え、よそ者が入つていく隙はないのだ。

だから若い娘と寝ることはなく後家が相手になる。

二十歳で一人立ちした。親方が死んだのである。焼死であつた。火の不始末による火事として処理されたが、「焼けただれた二人の死がいが並うで出てきた」のを不思議がった禰原老は「ええからだをしておつて、始終男どもがせりおうておつた」(2114三)博労宿の後家と寝ているところを焼き殺されたとみている。博労は村の間ではないので、村人はかかわりあうのを避けて何も言わなかつた。

禰原老は親方の得意先をもらつて一人前の博労になり、「それからはおもしろかつた」という。故郷に帰るべき家がないので、親方なじみの後家の家を渡りあるいて可愛がつてもらつて、「それで日がくれた」(2114三)。「ねたのは大方後家」で、「一人身の後家なら表だつて誰も文句をいうものはない」(2114三)。「大方後家」というからには亭主持ちの女をぬすんだこともあつたのだ。「一人身の後家」とは、旦那もちの後家、妾もいるということで、妾を持つほどの男ならばそれなりの力もあるだろうから、これはばれた時は事だ。男を特定していない後家ならばお互いさまだ、文句を付けられるいわれはない。陰で文句を言う者があるとすれば言う方が悪い。

住むべき家と妻をもたぬ男は「後家あそび」「よそのかかぬすみ」で、それなりに面白く世間を渡っていく。力量不足の禰原老は「親方のお古が多かつた」(2114四)。

親方なじみの博労宿の後家、そのお古の一人に禰原老は世話になつた。自身経験豊富で、また精力絶倫の親方にもきたえられていたお古の後家は不満を述べたてた、いわく「親方はよく喜ばせた、おまえはたよらない、おまえはこまい」(2114五)、彼も喜ばせようと一所懸命につとめたが「女の精のつよいのには勝てん」(2114五)というのがかえりみ

ての述懐である。男より二十ちかく年上、男と女のからだの隅々までしりつくした四十女は性欲の固まりみたいなので、彼に不満の分はほかで補いをつけていたであろう。

檜原老が彼女の宿に泊めてもらいはじめたころ、彼女には十歳にもならぬ娘がいた。彼女と関係するころには村の若い衆が目をつけるほどの娘になっていて、若い衆の手のつくのをおそれた母親は自分のそばに娘を寝かせた。檜原老の言うように、自分の「じるい（みだらな）」⁽²⁻¹⁾

四五 ことは棚にあげて娘は守ろうとするのは親心と言うべきであるが、すでに村の男の目につきはじめた娘をそばに寝かせて、男と事を行うのはどういふ神経か。娘になりたての女の子は自分の体をはじめとして性にかまらるあらゆることに敏感になっており、母の側に寝ていれば神経を尖らせて、母が男としていることの一部始終を見ているのだ。男と女をすることを実地に母親が見せているようなものであった。

わしもまた娘の一から十まで知って来てのう、おつかアのねている間に娘をものにしてしもうた。それからわしは娘をつれてにげた。

雪のふる山をこえてはじめて伊予からここの隣村まで来た。⁽²⁻¹⁾四五

男には手ごわい四十女よりは娘になったばかりの方がよいにきまつている。しかもかたい蕾のときから、わが手で「娘の一から十まで」、そろそろと開花の準備をほどこしてきたのだ。今まで人のお古ばかりだったのだから、その初々しさに心がときめいたはずである。娘にもはじめた女になったよろこびと、自分を女にくれた男に心ひかれるものがある。しかし、母親の目を盗むのがむづかしい、したい時にしたいようにはできない。用心してもいづれ母親にみつかる。見つかったときは

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪（三苦）

それこそ大事になる。

それだけではない、このことが集落の男たちに知れたときどうなるか。おつかあが腹立ちまぎれに若い衆に告げないともかぎらないのだ。告げなくても、いずれは知れる。そうなれば若い衆ではない彼に、集落の娘に手を出したとして足腰たたないほどの制裁がくわえられる怖れが多分にある。おつかあよりこの方が恐ろしかったのかもしれない。

子供時代の、雨の日の納屋の遊び事にはじまり、博労になって見聞し、みずからも体験した性はあまりにも日常的で、日常的であるがゆえに罪を意識することはあるまい。ただ、おつかあ若い衆への恐怖は抑えがたい、しかし互いに離れがたい。とすれば逃げるしかない。逃げるにしくはないと山を越えた。

母子相婚が禁忌なのと言うまでもなく、同母兄弟姉妹間の通婚を神が許さなかったのは、例えば允恭天皇紀に伝える木梨軽皇子と軽大娘皇女の物語に詳しい。そのようにいろいろある通婚の禁忌のなかで、古来この国は母とその娘に通ずるのを国津罪の一つにあげて厳しく戒めてきたのであり、あの光源氏が注意深く避けていたのは冒頭にみておいたとおりである。

母子相婚が他から強いられた禁忌ではなく、日々の暮らしの中のおのづからなる戒めであったように、母娘との通婚もまたおのづからなるものであった。それは自明のこと、人間普遍の禁忌と言ってよい。だが檜原老はそういう禁忌の存在を知らず、犯しているという認識はさらさらなかったようだ。性が日常の暮らしの中にあからさまに在るので、禁忌という認識の生じようもなかったであろう。繰り返すが、飯があるか

ら飯を食っているのと同じこと、飯を食うことになんの禁忌性もないように、そこに女が在るから交わるという感じすらおぼえる。事情は女に おいても同じである。そこに神への恐れはない。罪の意識もない。若い衆の制裁、人間への怖れだけがあった。

小さな納屋を借り、二人で世帯をはり、紙問屋の手先になって楮を買って歩いたこの三年ほどが「一番人間らしい暮しをした時」(214) までであったというのは、その意味で理解できる。視線を一つずらせば、通婚した女の娘との婚姻生活が「人間らしい暮し」になんら抵触していないことを意味しており、性はここまで規範のないものになっていたのである。

3 役人の嫁さん

櫛原老の言う「人間らしい暮し」は三年ほどでおわった。

楮買いは仕事の都合上官林の役人に会う必要がある、彼も担当の役人によく会った。役人は一軒家に夫婦で住んでおり、嫁さんは土佐の人で「色はあんまり白うはないが、眉の濃い、黒い目の大げえ、鼻すじの通った、それでまた気のやおい(やわらかな)人で、「いくといつも茶を出してくれた」(214) 博労時代には一人前に扱われなかつた男には、行けばいつもお茶を出してくれるだけでもその気遣いがうれしいのに、まして美しい嫁さんである、心にしみるものがあった。嫁さんにひかれていくようになったのは自然である。

旦那不在の日、洗濯をする嫁さんを見ながら話しこんだ。話の種は牛しかないの、「人をだまして牛を売買する話をしてきかせた」(214) のは、話をおもしろくしてご機嫌を伺おうとする底意が見えなくも

ない。嫁さんが濯ぎの水を井戸から汲みあげようとすると、汲んでやる。盥の水は捨ててあげた。「あなたはほんとに親切じゃ」(214) と礼を言われた。巡查と同じ官服を着てサーベルを吊った、偉い役人の嫁さんに礼を言われるなど初めてのこと、それからは旦那の不在をみはからって訪ねるようになった。家はおくまった小高い所にあるので人目につかない。時には駄菓子を買って、またある時は町へ出たついでに珍しいものを買っては婆(妻)に気づかれぬように持っていった。

「わしなんどにゆるす人ではないと思うとつたが」(214) というのは、ほしいと思つたことはあつたわけで、ただ身分が違い過ぎるし、人柄からしても旦那以外の男にゆるす人とも思えず、きざしてくる欲望を抑えていたのである。

訪ねて行けば主人が不在だからと言つて返されもしない。話しをすれば聞いてくれる。ささやかな手土産も受け取ってくれ、手伝いましょうと言えば手伝わせてくれる。よそ者の一軒家暮らしで知人はいない、旦那は留守がち、だから訪ねて来る者があれば世間話でもしながら一時の間を過ごすというのわからないではないが、経験豊富な男の嗅覚はなにやらを嗅ぎとつていたのかもしれない。

洗濯物干しを手伝つていて、「ついでに手がふれて、わしが手をにぎつたらふりはなしもしなかつた」(214)。「ついで」は本当に「ついで」なのか、それとも「ついで」のふりをして女の気持ち聞いてみたものであつたか。人目のない一軒家の庭先で、並んで洗濯物を干す男と女の風景は傍目にもかぎりなく親密な関係を思わせるもので、男は自分に対する壁が低くなつてゐるのを察して「ついで」手をふれさせたのではなかつたか。ふりはなさなかつたのは、じつと握られるままに握られていたとい

うこと、男をゆるしたのである。

男の気持ちも揺れたであろう。手まではゆるしても、旦那の目を盗んで、どこの馬の骨ともわからぬ男と寝る人とも思えない。自分を一人前に扱ってくれた、やさしくて美しい人を性の泥沼に引きずり込んではないという自製の気持ちもはたらいたか。しかし、とうとう「どうしてもその嫁さんとねてみようなんて」(214)訪ねて行った。秋であった。洗濯をしていたところに「声をかけるとニコッと笑うた」。ただでさえ自分にむけられた女性の笑顔はうれいしいもので、まして美人の「ニコッと笑うた」笑顔は男の心はずませる。軽い会釈しかかえってこなかったら、「上の大師堂で待つてるで」(214)という言葉は出てこなかったかもしれない。それだけ言うと、逃げるように大師堂へ上る坂道を息せきぎって上っていった。

「嫁さんとねてみようなんて」と言ったのは露骨だが、肉欲の一点だけで女をかまい、世間を渡ってきた男はそれしか言葉をもたなかったからで、幾度が訪ねているうちに今まで女性に対しておぼえたことのない美しいもの、やわらかで熱いもの、月並みな物言いをすれば恋慕に似た、心ひかれるものをおぼえたのであろう。

四角な大師堂は急な坂道を一丁ほど上がった、大きな松の木の下に建っていた。毎月二十一日以外に人の参詣はない。「えらい事をいったもんじゃ」と「半分後悔」しながら、それでも待つっていると、小半時ほどして、緋の着物を着た嫁さんが前掛けて手を拭き拭きして上がってくるのが見えた。夕日が小松にさしていた。あと四、五間のところで嫁さんが上を見上げたので「わしがニコッと笑う」(214)と「嫁さんもニコッと笑いなさった」。手をとってお堂のあがり段に腰をおろすと、

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

嫁さんは人目につくといけないからと堂の中に入っていった。彼も入っていった。

(214)

「わしのような者のいうことをどうしてきく気になりなさったか」官服にサーベル吊った役人のおだやかで美しい妻、主人の留守をはずかに守って、とても道を踏み外すとは思えないだけに、そう尋ねてみたいところである。

「あんたは心のやさしいええ人じゃ、女はそういうものが一番ほしいんじゃ」

旦那は厳めしい役人にありがちな堅いばかりの人で、嫁さんに冗談の一つも言わない人だったか。洗濯の手伝いなど男のすることではないと、家事の一切を嫁さんにまかせきりだったのかもしれない。昼日中は話し相手もない。そこへ現れた男は、嫁さんからすれば下衆の分際であったが、牛の売り買い話から井戸の水汲み、洗濯物干し、果てはささやかな駄菓子の手土産まで、男のしてくれることの一つひとつがやさしさとして嫁さんの胸にしみた。いつの世にも女は男にやさしさをもとめ、やさしさを受けたとき心をひらくものなのだろう。

男は魂胆があつてしたことではあるまい。いい嫁さんだから、自然にそういう振舞いになったということ。肉欲だけで世間をわたってきた男がはじめて知った、女の胸のうちであった。

それから四、五回くらい会った。

身分の高い女性で「はじめ一人まえに取り扱こうてくれた人」(214)に對する思いは純粹な思慕に高まつていた。それだけに、一方では迷惑をかけてはならないという思いも強まつていた。このまま逢引を

重ねていたら、人目のないところとは言つてもいつかはきつとばれるものだ。身を引くべきだと思つた。「女と関係してもそれで女が身のもてんような事があつてはならんから、人に知られるまえに手をきつた」(2157)のは、わが欲情よりも女に配慮したということである。

どれだけの女と肉欲だけのかかわりをもつたかわかりもしない、現に母とその娘に通ずる非道の男にして、このような思いがあつたのは、人間の道が見えていたと言えようか。

榑原老は嫁さんにはもちろん、婆にも黙つて「四年目にまた雪のふる道を一人で伊予へもどつ」(2149)で行つた。嫁さんとの別れは、振り返つて見て、生涯もつとも身にこたえて、半年は「気のぬけたように暮した」。峠の上まで行つて戻つて来るのが何度もあつた。

立ち直るのに半年を要して再び博労になり、「それからのわしはこれと思ふ女をみなかもうた」(2150)のは、嫁さんへの気持が純粹で強かつたことの反作用である。すぐれた女性へのこれほどの思い込みは、色好みの男の一つの姿ではあつた。「みなかもうた」のを一概に否定し去ることもなからう。

4 県会議員のお方

伊予へ逃げ帰つたあと、妻も戻つてきておつかあと同居した。榑原老は時々立ち寄るだけで、おつかあには男ができていた。当然である。

ある時、伊予の奥では一番の県会議員に、人力車の上から「ぼくろう」と声をかけられた。それまで道で会えば頭を下げてはいたが、声をかけられたのははじめてだった。よい牛を、おとなしい牝牛を世話してくれ、家に行けばお方がいるのでよく相談しておいてくれということだ

あつた。

その地方には縁がなく、また立派な博労も大勢いるのに、通りがかりに声をかけられたのを奇貨として訪ねると、家は高い石垣、石段、長屋門と城のような屋敷であつた。勝手口から用向きを言うと、お方さまが出てきた。四十まえで、色白、ぼつちやり、品がよくて観音様のようなお方であつた。下男下女まかせではなく、みずから牛の駄屋まで行つて、大きな牛はいらぬ、仕事はよくできてても牝牛は気が荒くて、牝牛にかえたいというのである。旦那は留守がち、女手で家を切り回すのは骨が折れて、田は小作にあずけることにしたという事情があつた。これまで出会つたことのない「ものいいのやさしい」(2151)お方で、噂に聞いていたとおりの「別嬪のおとなしいおかたさま」であつた。

榑原老は張り切つたはずである。気に入つてもらえる牛をさがし出して追うて行くと、喜んでもらえた。今まで飼つていた牛を引き出そうとすると、「赤飯をたいて食べさせるやら、酒を飲ませるやら、人間を扱ふのとちつともちがわ」なかつた(2152)。連絡は入れてあつたらうから、赤飯も酒も用意されていたものであろう。牛を引いて行く時は「ええとこへいつて大事に飼うてもらいや」とポロポロと涙を落とした。出たとこ勝負にあげられる榑原老も「なんとまあやさしい人もあるもんじゃ」といたく胸をうたれ、「てんでもものがちがうんぞな」(2152)と感に堪えた。

牛を見に時どき訪ねたが、旦那は滅多にいなかった。夫婦仲は悪くはなかつたが子供はなかつた。宇和島の妾に子供が三人いるということだった。

ある日、八つ下り(午後三時)頃訪ねると女子衆も男衆も出てこな

い。大声で「ごめんなされ」(2152)と言うと、櫛がけしたお方が裏の方から出てきた。牛の世話をしていたとのこと、これも驚きであった。牛の駄屋にまわってみると牛は「きれいにこすって」(2153)あった。

「そういうことは男衆にさせなされませ。おかたさまのような方のするもんじゃありません」

「わたしは牛がすぎで、八つ下りになると、下女に茶を持たせて畑仕事をしている男衆のところへやって、その間にこうして牛の世話をするのじゃ」

これにも驚いたが、八つ下りに行けばお方一人だとわかって、悪いと知りながらその時刻に行くようになった。

話と言つては牛のことだけ、お方の側にいるといい気持ちで、一つも一緒になつて手伝つておつた」のは役人の嫁さんの場合とかわらない。留守を守るさびしい女の気持ちを手伝いからほぐしていくのは、櫛原老の身についた技のようで、ここで聞き手の宮本常一氏は役人の嫁さん进行い出さないかと尋ねている。胸にこたえる質問であった。「あんたも悪いお人じゃ」(2155)と受けとめて、これが浮気というものかと思つたと答えたのは、嫁さんは本気だつたということになる。しかし嫁さんが本物でこちらは浮気というにしては、お方への気の入れようが尋常ではない。前引のようにお方の人柄のよさを並べ立てているのからしても、すっかり魅了されているのがわかる。嫁さんも本気だつた、こちらも本気、それがいつわりのないところであろう。嫁さんを片時も忘れることはなかったという言葉に、多少の誇張はあるにせよ嘘はあるまい。男の女性によせる気持ちは、だれか一人ということはないのだ。こ

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

れが平安の昔も今もかわらぬ男の気質で、色好みとはそういうものなのであろう。世間の底辺にあつて、女をかもうて日をおくる博労の身に色好みの伝統は、細ぼそながらなお流れていたとみてよからうか。

お方に惚れながら「手をかけちゃアいかんと思う」(2154)。しかし「いかん」ことだと思つにしろ「手をかける」という言葉が出てきた以上、「手をかける」まで一步である。気持ちを抑えきれなくなりつつある。お方のところへ行く時は、女にかもうて腎虚にして出かけているのは、精がたまつていたら手がでるのではないかと、それほど抑制に自信が持てなくなつてゐるのだ。

やはり、抑えきれず「わなにかけるようなことをした」(2154)。よい牝牛だから子を取りましようと思つたのである。牛の交尾を見せ刺激を与え、焚きつけてみようという魂胆なのだ。反応がなければやむを得ない、あきらめるまでだ。

櫛原老がよい牝牛を借りて行くと、お方は駄屋をきれいにし、敷藁をかえ、牛もびかびかにみがついて待つていた。牛の糞はゆるくて肛門のあたりが汚れがちなものだが、全身磨きあげられているのだ。婿を迎える花嫁に化粧をほどこすような気持ちだつたのかもしれない。お方さまほど牛を大事にする人を見たことがないと言つて、つぎの言葉がすらりとでた。

「どだい尻をなめてもええほどきれいにしておられる」というたら、それこそおかしそうに

「あんなこといいなざる。どんなにきれいにしても尻がなめられようか」といいなざる。

「なめますで、なめますで、牛どうしでもなめますで。すぎな女の

お尻ならわたしでもなめますで」(211-154)

失礼な、と怒らなかつた。真つ赤になつて向うをむいたお方に「いいすぎた」と思った男は牝牛を牝牛のところへ引いて行つた。

言い過ぎたというけれども、絶妙の話術だ。もともと性的な刺激をあたえて様子を見てみようというたくらみから始めたことだから、性的に露骨な話をして置いて、つぎに交尾をみせるというのは一連の流れである。だから、きれいな牛と褒めて、これなら尻でもなめられると転じて、さらに女の云々ともつていったのが妙なのだ。お方が顔を真つ赤にしたのは満足すべき反応であつた。

女の尻をなめるなど、どだい男が女にしてよい話ではない。まして博労風情が気品をそなえた高い身分の女性に言うべき言葉ではない。それを口にして機嫌をそこねず、仕掛けたわなにとらえ得たのだから絶妙の話術だという所以である。無学にして粗野、女たらしの博労にしてこの話術は、すぐれた色好みの証であつた。

男は牝牛を牝牛の所へ引いて行き、仕事にかかつた。交尾させることに一所懸命で、お方に気を取られるひまもなかつたが、済ませてお方の方を見ると、じいっと見ている。

「牝牛は済ませたあと牝牛の尻をなめるので、

「それ見なされ……」というと、「牛のほうが愛情が深いのか知ら

て、いいなさつた。わしはなアその時はつと気がついた。「この方はあんまりしあわせではないのだなア」とのう。「おかたさま、おかたさま、人間もかわりありませんで。わしなら、いくらでもおかたさまの……」。おかたさまは何もいわだつた。(211-155)

「牛のほうが」という言葉の前に「人間よりも」があるはずで、男がそ

こにお方の「あんまりしあわせではない」悲しみを感知したのは、人間の「あはれ」を感得する触覚を持つていたことなのであろう。父母の顔も知らず、学校にもあがらず世間をわたつてきた男がおのずから養つた人を見る目であつたかも知れぬ。

男の手をしっかりとにぎり、目にいっぱい涙をためて、お方はなにも言わなかつた。

わしは牛の駄屋の隣の納屋の藁の中でおかたさまと寝た。(211-155) 藁の中でお方を抱いたとき、雨の日に子守たちと寝ころがった納屋の藁を思い出したか。観音様をいだく勿体なさに、思ひうかべる余裕はなかつたであらう。

役人の嫁さんの場合もそうであつたけれど、ここにいたれば、淫靡淫乱とか浮気とか、はたまた貞操とかは問題でなくなつてゐる。男の真摯な欲情が女をつき動かし、女も木石ではない。人間とはこういうものなのだ。

「どんなことがあつても、わしはおかたさまを守つてあげねばならんと思うた」のに嘘はなかつた。極道したことも、嫁さんのこともみな話した。自分に具合の悪いことを残りなく話せばかえつて信用されるというのは人間心理の面白いところであるが、そんなこと狙いではなく、美しくてやさしいお方がさびしくしておいでなのを見ると「人間の屑じゃ。屑じゃが何ぞの役にたつかもわからんから、用立ててつかアされませ」(211-155)と言わずにはいられなかつた。自然と口をついて出てきた言葉には力があり、お方は「涙をながして喜ばれた」。

お方に、わたしはこんな下衆、博労にしか慰められないのかという無残の思いがなかつたのは、それはそれでお方の人間の器量を物語る。

人間の屑と自認する博勞にしてこの言葉である。この時、櫛原老は手練手管の男ではなく、一個の純粹人間になりかわっている。美しいお人をお慰めしてさしあげたい、お守りしたいという願いはここまで人間を純粹にし、女性の心を突き動かすのだ。それが色好みの極と言うべきであらう。

後ろ暗いことがあれば、周囲は気づかずなんとも思っていないのに人目が気になるのは誰にもありがちなことで、櫛原老は、関係が出来てからは今までのように気楽に訪ねられなくなっている。それでもお方に会いたくて、牛を見にという口実で出かけることはあつたであらう。しかし「もうわしのほうですすうで手出しはせんんだ」(211-155)という。それはお方の方から手をさし伸べたということなのか。関係ができてしまえば自分から手出しをしないでも、牛の話をし、手伝いをしていううちに、お方の方から求めてくると読んだ上でのことであつたか。女の方から求めてきた場合、女がより激しく燃えるのは察しがつく。お方の心にもからだにも火が点いたのを見てしまった櫛原老に、それくらいの計算はあつたのかもしれない。

一人の女性に対して純粹になり、時には計算もして動くのが人間なのであらう。純粹だけでは窮屈、計算ばかりでは卑しい、両方あつて人間の器量は大きくなるのだ。愛と情欲の二つをもとめて、知恵を尽くすのもすぐれた色好みであつた。

春に始まつた二人の関係は冬に終わった。性に無節操な博勞を「一人前に情をかけて」くれたお方が風邪から肺炎になつてぽっくり亡くなつたのである。櫛原老は「三日三晩、寝こんだまま男泣きに泣いた」(211-155)。

宮本常一「土佐源氏」などにみえる色好みの風景と国津罪(三苦)

5 櫛原老の述懐

お方の急死に悲嘆の底に落ちはしたものの女を絶つたわけではない。

どんな女でも、やさしくすればみんなゆるすもんだな。(211-156)

たしかに嫁さんへの、お方への櫛原老はこの上なくやさしかった。男という男が櫛原老を信用しなかつたなかで「女だけはわしのいいなりになつた」のはやさしくしたからだ。

男は「みな女を粗末にする」(211-156)。県会議員だつて妻を粗末にしていた。それで、少しやさしくすると「女はついてくる気になる」のだ。

わしは女の気に入らんような事はしなかつた。女のいう通りに、女の喜ぶようにしてやつた。(211-156)

やさしくすればゆるすから優しくするのはなく、女に優しくするのは子守たちとの遊び以来身についた習いになつていて、その時より優しくすれば女はゆるすということを学んでいたのだ。

女をかまう「ねぐらの定まらん暮し」(211-156)を続けた拳句、三日三晩目が痛んで見えなくなつた。「極道のむくい」(211-156)と思つた。

目がつぶれて行くところもないので、それまでろくに寄りつきもしなかつた妻の所へ行くと「とうとう戻つて来たか」と、「泣いて喜うでくれた」(211-156)。

夫婦らしく暮したのははじめの三年だけである。しかも逃げていった先に置き去りにして姿を消した。置き去りにされた妻が戻るとすれば伊子の母親の家しかない。どの面さげて戻ってきたと母親に叱られるのを覚悟で戻るかかなかつたはずで、敷居は高かつたにちがいない。それでも母と娘がなんとか折り合いをつけて一つ家にくませたのは、母親に別

の男が出来ていたからでもあったか。

目がつぶれて妻のもとに戻ってきたとき禰原老は五十を超えていた。おつかあは亡くなっていたであろう。打ち捨てられた二十余年の歳月を恨まず男を受け入れた妻は、目が見えるようにと禰原老の手を引いて四国四十八ヶ所参りにでかけた。妻もすでにお婆である。

そして、流れついた禰原の橋の下にむしろ囲いの乞食小屋をこしらえ、すみついて三十年近くの乞食暮らしである。八十歳もずいぶん超えた。夕食後、農家にお貰いにまわるお婆に食わせてもらっている。よそ様にお貰いに行くなど女にしかできないこと、実はここに男にはない女の勁さがあるのだが、禰原老はそれに気がついていない。

やさしくすれば女は許すと言うが、許されるほどお婆にやさしくしたかと振り返れば忸怩たるものがあるのかもしれない。妻は別という理屈は通るまい。「ゆるす」は体だけではない、それまでの所業の一切をふくむこともあるのだ。

「盲目になっても女房だけはみすて」(211-113) ず、「一番しまいまでこのこったのが婆さん一人」(211-157) であった。禰原老には手を合わせとも痒み足りない存在になっていたのである。

宮本氏に「あんたも女をかもうたことがありなさるじゃろう」と言つて、

女ちうもんは気の毒なもんじゃ。女は男の気持ちになつていたわつてくれるが、男は女の気持ちになつてかわいがる者がめつたにないけえのう。とにかく女だけはいたわつてあげなされ。かけた情けは忘れるもんじゃアない。(211-157)

無学の男にしてこの言葉である。生涯かけて、極道の果てに得た感懐が

これで、女の哀れさへの理解も深く、日本の色好みを代表する光源氏の言葉といつても通る内容を持つている。

盲目も乞食暮らしも「極道のむくい」と言う。その極道に母と子に通じる国津罪もふくまれるのかと、国津罪に関心を抱く私は思っている。そしてお婆については、橋の下の乞食暮らしに国津罪にかかわった女の科を見ている。

注

- (1) 三苦浩輔『源氏物語の民俗学的研究』「六条御息所と柏木事件」。桜楓社 昭和五十五年六月。
- (2) 宮本常一『忘れられた日本人』。岩波文庫 昭和五十九年五月。
- (3) 『山頭火日記』全八巻。春陽堂書店 平成元年六月―二年三月。
- (4) 高崎正秀著作集第五巻『物語文学序説』「異郷意識の展開と説話的世界」。桜楓社 昭和四十六年四月。
- (5) 三苦浩輔『物語文学の伝承と展開』第一部。おうふう 平成十九年十月。

引用文

伊勢物語、源氏物語、東海道中膝栗毛は日本古典文学全集、神霊矢口渡、御曹子鳥渡は日本古典文学大系。数字は頁数。

【付記】「地方へ行くと、父娘や兄妹が夫婦になつていたりする家もあつて、家庭そのものはめっちゃめっちゃなところでも、村となるとキッチンとまとまってる」(戸板康二『折口信天坐談』五九頁。中央公論社 昭和五十三年九月)。
これは折口昭和二十年十月の坐談で、母と子とを犯す国津罪と、はらから婚に触れている。昭和にも地方ではこういう肉親間の通婚があつたのであり、それは禰原老の土佐に限らず、日本に普通の性風土と言つてよいのかもしれない。